個性輝くリハビリテーション専門職の育成への挑戦

健康科学部リハビリテーション学科 学科長 米津 亮

2018年4月に開設したリハビリテーション学科は、2期生まで世に輩出しました。卒業生が、作業療法士および理学療法士として社会で活躍していることを耳にすると、大変嬉しく思います。

彼女たちは4年間で必死に専門科目の知識・技術を吸収・習得したわけですが、女子大学として初めてリハビリテーション学科を開設した強みを感じているのか、そして我々教員もそのような強みをもった教育が展開できていたのか、自問自答していました。そのような折に、三菱みらい育成財団（https://www.mmfe.or.jp/）から大学1・2年生を対象とした教養教育に関する助成の案内を目にしました。そして、他の大学では実施されてない、女性の強みを活かした魅力ある教育プログラムを本学科で展開したいと思い、本助成に申請をしました。

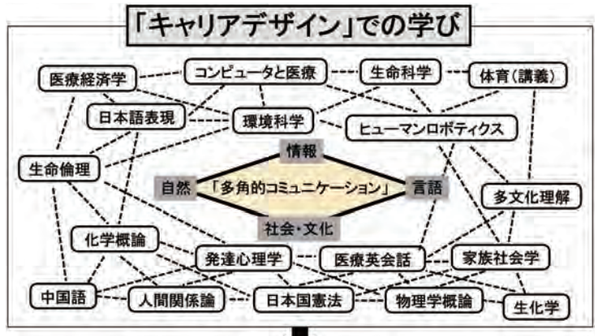

図 プログラム概念図

申請した教育プログラムの背景と想い

今回、学科で申請した教育プログラムは、「基礎教養科目から形成する人と信頼関係を築く多角的コミュニケーション力」です。このプログラムを申請した主な理由に、コロナ禍におけるオンライン教育の弊害が挙げられます。

2019年12月に中国で初めて報告され、日本でも2020年4月には大学内に新入生および在校生がまったくいない不思議な光景での大学教育が展開されました。すべての大学生がオンライン教育を実施したわけですが、カメラをOFFにしたまま、互いの目を見て話す機会が減り、偏ったコミュニケーションを培わせた側面を否定できません。このため、自分の考えの表出（自己開示）を抑え、通信機器を媒体とした限られた文字情報でのやり取りにより、「聴く力」、「伝える力」、「質問する力」、「協調する力」の4つの要素が低くなったように感じているのは私だけでしょうか？

そのため、自校教育科目である「キャリアデザイン」という科目で、「他者主体の態度・行動を実践できるコミュニケーション力の育成」を目指したプログラムを企画しました。その内容は、コミュニケーションを大学1・2年次に開講される基礎教養科目とつなぎ合わせ（図参照）、学科が設定したディプロマポリシーに基づく人材にどのように近づいていくのか自分軸の形成を目的とした探索学修になります。

申請した教育プログラムは、高評価で書面審査を通過し、面接試験もパスし、採択に至りました。

教養科目と専門科目の融合を目指した教育の創造

リハビリテーション学科の教育課程は、「理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則」に準拠し、編成しています。このため、自由度の少ない教育課程で他の養成校との違いを出しにくいのが現状です。その中で、学科で編成した基礎教養科目と専門科目での学びをつなぎ合わせることが、学生の学びを深めてくれると信じています。そして、女子大学でリハビリテーション専門職を育成する意義を捉えなおし、他の養成校ではない特色ある教育を展開したいと考えています。

現在、学科では1年生の導入教育から2年生、3年生、4年生を対象に一貫したコミュニケーションプログラムを株式会社プロサーブと共に展開しております（写真参照）。自分を見つめなおし、他者を受け入れ、リハビリテーション専門職としてのリーダーとしての育成も視野に、楽しく、探求心を持って、学ぶ力をサポートしたいと考えています。

どうなる女子大？ どうする家政大？

教職員研究会

令和5年度の教職員研究会は大河ドラマをもじって、重要かつキャッチーなテーマ設定となりました。歴史ある女子大学の統合・募集停止・共学化等、大きな転換を図った他法人のニュースが報じられるなか、7月20日に「社会や受験生が女子大学、高等教育に求めていることはどう変わっているのか」、「そのような環境において、女子総合大学である東京家政大学はどのような展望があるのか」をテーマに研修を実施しました。

まず、徳永理事が基調講演「雇用就業に関連する社会の変化を踏まえた大学教育の提供」として、特に大学の出口部分「就職」を切り口に高等教育政策及び市場動向について解説をしました。企業採用要件のスキルベースへの移行、国際的通用性の高いスキル証明としてOpen Budge形式等のMicro-Credentialsの重要性が高まっていること、ChatGPT等の新技術を活用できる人材育成を高等教育に含めていくこと等、社会要請対応としての高スキル人材養成及びリスキリングへの実装が示唆されました。

続いて「副学長シンポジウム」として、学長と共に本学の改革を推進する「副学長」にスポットを当て、4名の副学長ディスカッションを通じて、全教職員に本学の改革の方向性を共有しました。シンポジウムでは常時コメント受付のほか、「あなたが副学長なら本学で何をしますか？」といった問いかけを通じて教職員からもリアルタイムで討論テーマを集めることで、教育・経営・施設等の幅広い話題が展開されました。

出てきた内容の中には

- 「引っ張る」ではなく、「後ろから全体を支える」新しいリーダーシップ像の確立
- 総合大学のリソースを活かした分野横断的な教育課程展開の充実
- 大学の所在地域と連動した都市計画や地域連携への展開
- LGBTQや共学化への東京家政大学としての向き合い方

といった今後の改革のコアとなりうるキーワードが多くちりばめられ、東京家政大学の今後について参加者は多くの展望が得られました。

当シンポジウムのテーマを受け、9月5日には教職員研究会第2部を開催。「―事務部門トップによるシンポジウム―」を通じて教育・経営実務へと具体化を行い、更なる教育改革の推進をはかります。

大王製紙株式会社との共同研究

健康科学部リハビリテーション学科
清水順市／趙 吉春／岡部拓大／平田恵介

「アテント 超うすパンツ 下着爽快」を歩行解析で検証

衛生用紙製品№1ブランドの「エリエール」を展開する大王製紙株式会社（本社：東京都千代田区）と2020年10月から共同研究を続けています。今回は「アテント 超うすパンツ 下着爽快」（写真1）が【歩きやすさと】と【ズレにくさ】の観点から実験を行いました。トレッドミル上（写真2）を一定速度で歩行し、骨盤に貼付した6軸力覚センサーで着圧の変動を計測しました。今回の測定では、実際に排尿時の状態と同一するためにオムツ内に温水を流した設定条件で行いました。その結果、100ccの尿量では着圧の変化がなく、さらに装着感も変わらないという結果を得ることができました。今後はより快適な装着感を得られる紙パンツの開発へ向けた研究をめざしていきます。

写真2

写真1